

パークリー主教とそのメッセージ¹

ジョージ・H・ミード著

鎌田大資・桑原 司訳

パークリー主教のこの国〔アメリカ〕への上陸200周年を記念し、カリフォルニア大学とパークリー市共催の祝典にて1929年1月23日になされた講演

200年前、アメリカの海岸にジョージ・パークリーが上陸しました。その人は、まだ20代の頃に出版した本で、世界第一級の哲学者のあいだに座席を確保しました。人間関係においてあまりにも魅力的で賞賛的だったので、スウィフト司祭²やアレキサンダー・ポープ³のような、人間本性について悲観的で、表現において辛辣だった人たちも、彼については良いことしか語りえないような人でした。また物惜しみしない熱情によって、当時の教会での王侯に等しい地位を辞して、バミューダ諸島での設立が期待されるカレッジの学長職を、年俸100ポンドで引きうけました⁴。そして熱心なあまり実際の判断には欠けており、次のように信じていました。北アメリカのインディアンの中にみずみずしく汚れない人間本性を見出し、バミューダ諸島のカレッジで人格の完成に向けてかれらを訓練できるだろうと。またそこからアメリカ大陸に住むすべてのインディアンに光と美德を与える宣教をはじめられるだろうと。さらにタール水⁵に、あらゆる人間の病を癒す万

¹ 本稿は、George H. Mead, Bishop Berkeley and His Message, *The Journal of Philosophy*, Vol. 26, No. 16 (Aug. 1, 1929), pp. 421–430. の全訳である。「シンボリック相互作用論基本文献翻訳シリーズ」(<https://ci.nii.ac.jp/naid/120006882685/>)の第2号として公刊するものである。なお、本稿における脚注は全て訳注である。

² ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667–1745) はイングランド系アイルランド人の作家、聖職者。風刺文学の巨匠。司祭 (Dean) はアイルランド教会における職名。後出の『ガリヴァー旅行記』(Swift, Jonathan, [1726] 1735, *Gulliver's Travels*, London: Benj. Motte (=2021, 高山宏訳『ガリヴァー旅行記』研究社) その他で日本でも広く知られる。本論に登場する18世紀の人名や著作のうち、パークリーやその懐疑論、経験論に特にかかわるものは、サミュエル・ジョンソンの逸話以外はわずかであり、本筋との関連が薄い事項の解説は論旨理解に不可欠ではないが、ミードが18世紀の社会や歴史に関する雰囲気伝えるために言及しているものと見て、簡略な略歴と解説のみを付する。ミード自身は参考文献を明記しないタイプの研究者なので、文献リストは設けない。

³ Alexander Pope (1688–1744). 英国最大の詩人のひとり。

⁴ パークリー (George Berkeley, 1685–1753) は、1928年9月第1週に43歳でアメリカに船出し、1929年1月23日にロードアイランド、ニューポートに上陸、2年8か月滞在した。著作集の年表を参照。[1957] 1979, “The Chief Events of Berkeley's Life,” *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, V.5, Nendeln, Liechtenstein: Kraus Reprint, 143–146, 特にp.145。以下、パークリーの著作の参照箇所はすべてこの著作集により示し、著者、編者、出版社名は略す。

⁵ パークリーのタール水に関する各種の文章が以下の書物に収められている。1744, “Siris: a Chain of

能薬を見いだしたのだとも。

彼は自分の希望を詩の形で表現しました。その詩は、この機会に読みあげるのに、きっとふさわしいものだと思います。

アメリカに諸学技芸を根づかせる見通しに関する詩⁶

あらゆる栄光あるテーマにおいて不毛な

時代と天候に、詩の女神も嫌気を催し、
遠く離れた地に、名誉に値する人民が

生まれる良き時節を、いまや待ちうけている。

幸せにまさる気候のもと穏やかな太陽と

処女なる台地がこんな情景を仕立てる。

技芸の力が自然に、

夢想された美が真実に打ちまかされるのだ。

幸せな気候のもと無垢なる情景が開ける。

そこでは自然が導き、美德が支配し、

人間が真実と良識に法廷や学校の

美辞麗句を押しつけることもあるまい。

そこで新たな黄金時代が、

帝国と諸技芸の勃興が、

靈感あふれ知恵あるすぐれて偉大な叙事詩が、

もっとも賢明な頭脳ともっとも尊い心情が、歌われるだろう。

衰え行くヨーロッパがはぐくむのではなく、

Philosophical Reflexions and Inquiries, Concerning the Virtues of Tar-Water," [1953] 1979, *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, V.5.

⁶ この詩は前注で参照されたタール水に関する著作に収録されている詩句を除き、パークリーの詩作で唯一、知られているもの。[1955] 1979, "Berkeley's Verses on America," *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, V.7, 367-373. 初期稿その他の資料から、彼がアメリカへ到着する3年まえ、1726年ごろの執筆と見られ、1752年に初めて公刊された。各種の詩のアンソロジーにも収録され、特にアメリカでは広く知られる。カリフォルニア大学パークリー校の命名にあたって同大学理事や、学長によりこの詩や作者の事績が想起され、新キャンパス名として哲学者パークリーの名前が採用された。パークリー歴史協会 (Berkeley Historical Society) のHPを参照 ("Why is Berkeley Called Berkeley?" <http://www.berkeleyhistoricalsociety.org/resources/bishop-george-berkeley.html>. 2021年3月7日閲覧)。

みずみずしく若いヨーロッパがはぐくんだように、
天上の炎が地上の土くれを元気づけたころ、
未来の詩人により歌われることだろう。

西の方、帝国は進路を取る。

最初の4つの幕はすでに過ぎさり、
第5の幕がその日の芝居を閉じるだろう。

時（とき）のもっとも尊い子孫はどん尻に控えている。

パークリーのバミューダ・カレッジのため議会で議決した2万ポンドは、決して彼の手元には届きませんでした。ロードアイランドのニューポートで、彼は5年間そのお金を待っていたのですが。理想主義的とはいえある首相⁷が、そのお金を別の目的のために使ってしまったのです。もし歳出予算が彼の手元に届いていたとしても、南海バブル⁸が破裂せざるを得なかったことで、パークリーの失望がいかにかりであったかを推しはかろうとする人もいるかもしれませんが、それよりもこうした些細な失望をこえて彼を祝福すべきでしょう。失望しても彼は生きいきとした押しひしがれることのない熱情を持ちつづけていましたし、時の流れのなかで、バミューダ諸島からかなり離れているとはいえ、彼の希望と願いを具現化する偉大なアメリカの大学に、その名前が結びつけられていったのです。

偉大な主教の名前とこの場所、また地理的にここに位置する大学とが結びつくということに、幸運以上の何かがあったのではないかということについて考えてみるべきでしょう。こうすることでパークリーの哲学の意図を、同時代に流布していた思想や言葉づかいから解きほぐし、彼が切なる熱心さで説きすすめたメッセージを、わたしたち自身の思想や日常語での装いに着せかえることになるでしょう。というのは、パークリーには全生涯にわたり思考や著述を一貫するメッセージがあるからです。そして、そのメッセージのためには、彼の若き日々のイデオロギーや後年の新プラトン主義、バミューダ・カレッジのための計画、またタール水に関する広告も、おおむね時代の趨勢に定められたその伝達媒体に過ぎなかったのです。

パークリーは18世紀、英国の18世紀に属していました。すなわちアディソン（Addison）と『ス

⁷ 当時の首相は、次注で見る事情から、第一大蔵卿と兼任のロバート・ウォルポール（Robert Walpole, 1676–1745）。

⁸ 1720年の英国に生じた投機ブームによる株価の急騰と暴落、およびそれに続く混乱。1711年に設立された南海会社（The South Sea Company）が国債を引きうけて、貿易利潤でその費用を賄うべく株式の販売などを投機的に推進したことにより、金融バブルを招き破綻した。財政専門家としてロバート・ウォルポールが事態の収拾に当たり、彼は1721年から1742年まで第一大蔵卿（非公式だが首相と兼任）となって現在の議院内閣制の基礎を築いた。

ベクテイター』誌 (*The Spectator*)⁹, スティール [スターンの誤りか]¹⁰とその『センチメンタル・ジャーニー』, サミュエル・ジョンソンとその『ラセラス』¹¹, アレクサンダー・ポープと『髪盗人』¹², スウィフト司祭の『ガリヴァー旅行記』の, バトラーの『アナロジー』¹³の, アイザック・ニュートンとその『プリンキピア』と『流率論』¹⁴の, マンデヴィルとその『蜂の寓話』の, シャフツベリとその *Characteristics*¹⁵の, マシュー・ティンドールとその *The Gospel a Republication of a Religion of*

⁹ ジョセフ・アディソン (Joseph Addison, 1672–1719) は、イギリスのジャーナリズム草創期の1711年から1912年、また1914年に、日刊紙としてウィッグ的な立場の世相批評エッセイを刊行した (最初はリチャード・スティール (Richard Steele, 1672–1729) が協力している)。全文を収録した合冊版でも広く読まれた。Addison, Joseph and Richard Steele, 1711–1712, 1714, *The Spectator*. 邦訳は、大阪経済大学の紀要に1995年から2014年にかけて門田敏夫が掲載した。「門田敏夫教授 略歴・業績目録」参照 (2014, 『大阪経大論集』64 (6): 277–280)。

ここでは18世紀の著作が列挙されており、何も注記しないのは不親切なので、蛇足ながら、略記されている著作の原題、邦訳文献などを補う。ただし、以下、日本でも著名で説明の必要がない下記の著作の解説は省略する。スウィフト『ガリヴァー旅行記』, マンデヴィル (Bernard Mandeville, 1670–1733)『蜂の寓話』 (1714, *The Fable of The Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*, London: J. Roberts. (=1985 [2015], 泉谷治訳, 『蜂の寓話——私悪すなわち公益』新装版, 法政大学出版局; [1993] 2015, 泉谷治訳, 『続・蜂の寓話——私悪すなわち公益』新装版, 法政大学出版局。)), ニュートン (Isaac Newton (1642–1727) の『プリンキピア』 (Newton, Isaac, 1687, *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*, London: Societatis Regiæ (Royal Society). (=1977, 中野猿人訳, 『プリンシピア 自然哲学の数学的原理』講談社。)), デフォー (Daniel Defoe, 1660–1731)『ロビンソン・クルーソー』 (1719, *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*, London: W. Taylor. (=2019, 鈴木恵訳, 『ロビンソン・クルーソー』新潮社。))。

¹⁰ 『センチメンタル・ジャーニー』 (1768, *A Sentimental Journey*, London: T. Becket and P. A. De Hondt. (=1952, 松村達雄訳, 岩波書店) の著者はロレンス・スターン (Laurence Sterne, 1713–1768)。アディソンの協力者のスティールと混同したのかもしれない。

¹¹ Samuel Johnson, 1759, *The History of Rasselas, Prince of Abissinia*, London: R. and J. Dodsley, W. Johnston. (= [1962] 2011, 朱牟田夏雄訳, 『幸福の探究——アビシニアの王子ラセラスの物語』岩波書店; =2019, 中村賢一訳, 『アビシニアの王子ラセラス』朝日出版社。) 本作は、いま風にいう自分探しの寓話となっている。ジョンソン (Samuel Johnson, 1709–1784) は英国の詩人、文芸評論家、最初に用例中心の英語辞書を編纂した辞書編纂者。彼のパークリー懷疑論への態度を示す逸話については、後注25を参照。

¹² Pope, Alexander, [1712] 1714, *The Rape of the Lock*, London: Bernard Lintott. (=1973, 岩崎泰男訳, 『髪を掠奪: 英雄滑稽詩: 五詩篇』同志社大学出版部。) ポープの知人であるカトリック貴族の二人の男性が、ある女性の髪を一房切りとったことから争いが始まったという事件の顛末を神話、伝説に託して歌った風刺詩。

¹³ Butler, Joseph, 1736, *The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature*, London: James, John, and P. Knapton. イギリス国教会の主教、バトラー (1692–1752) は正常な状況では人間は道徳的生活を送るように作られていると主張した。理神論 (deism) への有力な反論の書。自然は謎に満ちており、それは聖書の啓示の不思議さと同様である。後出のティンドールが理神論の代表的論者であり、二人は論敵である。

¹⁴ Newton, Isaac (trans., J. Colson, Henry Woodfall), 1736, *The Method of Fluxions and Infinite Series; with its Application to the Geometry of Curve-Lines*, London: Henry Woodall. 1671年に書き上げられていたが公表されず、微積分学の発展史においてライプニッツとの第一発見者争いにおいてニュートンの草稿の重要性が高まり、その没後、ラテン語の原稿から英訳出版された。タイトルは『流率と無限数列の方法』と訳されることがある。

¹⁵ 第3代シャフツベリ伯爵アントニー・アシュリー＝クーパー (Anthony Ashley Cooper, Third Earl of Shaftesbury, 1671–1713) は、祖父の友人であったジョン・ロックに家庭教師として教育を受けたイギリスの哲学者、政治家。 *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, V. 1, 2 ([1711] 1900, ed., John M., Robertson, London: G. Richards) はそれまでの論考、文章を集大成した私家版。

*Nature*¹⁶の、デフォーと『ロビンソン・クルーソー』の、リチャードスン¹⁷、スモレット¹⁸、フィールディング¹⁹の、自由思想家、道楽者、伊達男ブランメル (Beau Brummel)²⁰の、またジョン・ロックの「新しい思考法」(*New Ways of Ideas*)²¹の世紀に属していました。それは汚職が政治の仕組みに組み入れられていた時代であり、公金横領が専門の職業であった時代です。こうしたごた混ぜのすべてにわたり共通の特性があります。それはそこにあるものへの固定、所与の事態における塹壕戦、耳目や手の届く限りのものを享受しようという決意、理論への不信、批判的論争にうんざりしてそれを回避することです。英国は革命をくぐり抜け、内戦の回避に成功しました。かの国ではピューリタンの聖人たちの連隊、スチュアート朝の独裁から逃れました²²。かの国は、議会の非論理的な支配のおかげで大混乱に陥り、あらゆる大げさな愛国心 (loyalties)²³に深刻な不信が抱かれています。それは物質主義 (materialism)²⁴の時代でした。わたしたちの所有物へと関心を集中させること、

¹⁶ Tindal, Matthew, 1732, *Christianity as Old as the Creation: Or, the Gospel, a Republication of the Religion of Nature*. V. 1-3, London: Grant Richards.) 理神論の代表的著作。世界は神の創造したものだが、神の支配を離れて自然の理法に従って動くと考える。

¹⁷ サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) は、イギリスの小説家。近代小説の祖のひとり。

¹⁸ トバイアス・スモレット (Tobias Smollett, 1721-1771) は、イギリスでピカレスク小説というジャンルを確立した小説家。

¹⁹ ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding, 1707-1754) は、イギリスの劇作家、小説家、治安判事。「イギリス小説の父」。

²⁰ Beau Brummell は通称で、本名はジョージ・ブライアン・ブランメル (George Bryan Brummell, 1778-1840)。いわゆるダンディズムを代表する人物。生田耕作 (1980, 『ダンディズム——栄光と悲惨』中央公論社)、山田勝 (2001, 『ブランメル閣下の華麗なダンディ術——英国流ダンディズムの美学』展望社)などを参照。

²¹ 「観念の新しい方法」などとも訳せる。*New Ways of Ideas* とイタリックになっているがロック (John Locke, 1632-1704) に同タイトルの著作はない。ただし、Locke, *New Ways of Ideas* と入力してインターネットを検索すると、以下のような著作が見いだされた。Ward, A. W. & A. R. Waller (eds.), 1912, *The Cambridge History of English and American Literature: An Encyclopedia in Eighteen Volumes*, V. 8, *The Age of Dryden*, London: Cambridge University Press. その第14章が W. R. Sorley による “John Locke” という章 (pp.328-348) であり、その第4節が ‘The “New Way of Ideas” Opened by Locke’ (pp.332-334) となっている。とはいえ節分けはインターネット上では分明だが、原文にそれほど明確な見出しは付されていない。発行年を見てもこの権威ある文学、文化史の百科全書的著作がミードの参考文献の一部であったとしても不思議はないと思う。「ロックの経験論」に関する主要著作は、1690, *An Essay concerning Human Understanding*, London: Tho. Basset. (=1940, 加藤卯一郎訳, 『人間悟性論』上、下、岩波書店; =1968, 大槻春彦訳, 『人間知性論』, 大槻春彦編, 『世界の名著 27 ロック・ヒューム』中央公論社, 61-188. とともに抄訳)

²² 清教徒革命 (1642-1649)、チャールズ2世による王政復古 (1660)、名誉革命 (1688-1689) などの政治的動乱に伴う社会の混乱に言及している。イギリスでは清教徒革命において一度は王政が廃止されるが、のちには議会と王権は共存し、王は「君臨すれども統治せず」とする立憲君主制が確立する。この方式は、第二次世界大戦後の日本で、天皇の人間宣言を経た政治制度のモデルのひとつとなった。

²³ 愛国心への不信という点で特に思い出されるのは、ジョンソンの以下の金言。「愛国心とは悪党の最後の逃げ口上さ (Patriotism is a last refuge of a scoundrel)。」(訳文は、永嶋大典, 1984, 『ドクター・ジョンソン名言集』大修館, 150.) ボズウェルの『ジョンソン伝』(Boswell, James (ed., George Birkbeck Norman Hill), [1791] 1887, *Boswell's Life of Johnson*, V.1-4, Oxford: Clarendon Press. (=1981-1983, 中野好之訳, 『サミュエル・ジョンソン伝』1-3, みすず書房) の該当箇所は、Boswell [1791] 1887, V.2, 348=1981-1983, V.2, 127.

²⁴ materialism は、パークリーの哲学的主張としては、従来から物質論と訳されてきた。これは精神の外部で物質の存在を主張する立場であり、パークリー自身の反物質論 (anti-materialism) と対立する。ただしここではイギリスの王政の存立が揺らいだ時代の財産への執着について述べる社会的含意を持たせた言葉となって

またどれほど論理的な理論のためであっても所有物をその犠牲にしないことと、物質主義の意味をわたしたちが解するならばということです。

また青年哲学者パークリーは、現実を直接の経験から得られるものに限定するうえで、ジョン・ロックよりもはるかに徹底していました。そして、ロックの「新しい思考法」を携えてパークリーは歩みを進めました。さらに彼はもっと論理的でした。ロックの言によると、わたしたちの全知識は、彼が観念 (ideas) と呼ぶ感覚によるものであり、精神の内的な活動の印象に関するものです。しかし彼が認めるところでは、堅固な延長に関するわたしたちの感覚が、外界に延長された事物の経験を与えます。これに対するパークリーの返答によると、触覚と接触に関する感覚は、色、におい、音、ぬくもりの感覚と同じ問題に直面しています。それらはわたしたちの感覚に過ぎません。その現 (真) 実性 (reality) はわたしたちがそれを感じているということだけです。存在とは感覚です (*Esse est percipi*)。すべてはとても単純なことです。結局、世界はわたしたちが経験するだけのものであり、わたしたちは感覚だけを経験するのです。ここまでのところ、これは堅実な18世紀の物質主義ですが、18世紀の常識ではありません。イギリス人の精神 (mind) に訴えるには論理的すぎるのです。ジョンソン博士はこのパークリー流の観念論に反駁するのに、地面のうえで跳びはねて見せました²⁵。わたしたちは外界の堅固な事物の経験をもつのであり、単に延長における固

いる。また、19世紀半ばの共産主義、マルクス主義の登場以来、ヘーゲルの観念論に対置される唯物論として、経済現象を社会変動、変革の主動因とする語義をも含意しているので、そうしたすべてを標示しうる物質主義という訳語で統一した。

²⁵ 前注のボズウェルの『ジョンソン伝』から、該当箇所を引用する。

「我々は教会を出てしばらくの間、物質なるものはこの世に存在せず、宇宙の万象はすべて観念に過ぎないと立証するパークリー主教の巧妙な詭弁を話題にした。彼の教説が間違いであることを我々は心に納得しうるけれども、その論駁は不可能だ、と私は語った。私はこの時のジョンソンの俊敏な反応を今後決して忘れないだろう。彼は力一杯で大きな石を蹴り上げてその弾みでよろけながら「僕はこうやってその説を論駁する」と叫んだ。」(Boswell [1791] 1887: V.1, 471=1981-1983: V.1, 349) この文面では「大きな石 (large stone) を蹴りつけて反動でよろめく」という動作が描かれており、「大きな石」というあいまいな表現から、石碑、石造りの建物の壁面、歩道の縁石などが連想され、多様な表現に変奏されていく。ちなみに、『ジョンソン伝』では上記のくだりの直後、ヨーロッパに船出するボズウェルと彼を見送るジョンソンは、以下のような会話を交わしている。

「私は言った、「先生、私が留守の間もどうか私を忘れないでください。」ジョンソン、「いや、君、僕が君を忘れるよりも君が僕を忘れる危険の方が多い。」(Boswell [1791] 1887: V.1, 257=1981-1983: V.1, 350)

何気ないこのやり取りは、室内で目をつぶった場合に、認識されない間は室内の物質はその人にとって存在しなくなると考えてよいと、認識されない外界の物質の存在を抹消するパークリーの説を正確に理解して、踏まえた表現となっている。同様の表現は、『ジョンソン伝』の別の箇所にもある (Boswell [1791] 1887: V.4, 27=1981-1983: V.3, 84)。

まぎらわしいことにパークリー著作集には、アメリカ人聖職者、哲学者である同姓同名のジョンソン (Samuel Johnson, 1696-1772) との、哲学的往復書簡が収録されている ([1949] 1979, "Philosophical Correspondence between Berkeley and Samuel Johnson 1729-1730," *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, V.2, 265-294)。「パークリーの観念論」に関する主著は、1710 "A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge. Wherein the Chief Causes of Error and Difficulty in the Sciences, with the Grounds of Scepticism, Atheism, and Irreligion, are Inquired into," [1949] 1979, *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, V.2, 19-113. (= 大槻春彦訳, 1958, 『人知原理論』岩波書店。)

目をつぶっている際に知覚から消える外界の物質の存在を、認識論的に抹消することを表明しているのは

さの感覚についての経験だけをもつのではないということについて、彼は完全にジョン・ロックと同意していました。もちろんパークリーは返答しながらこう問いかえすこともできたでしょう。外部の事物の視覚的経験をもつときにいつも固さや延長の感覚を経験するならば、固さや延長についての感覚をもつこと以上の何かが、外部の事物を経験する際にあるのでしょうか。ロックの新しい思考法とともに旅をする人なら誰でも、そこで何かの違いを見いだすことは難しいと述べるでしょう²⁶。もし彼が自分のつま先を突きさすなら、延長された固さについての痛みの感覚が、そこにあるすべてでしょう。外部にあることとは感覚にとってはもう一つ別の局面であり、それは個人にとってのある感覚であり、色や音やにおいとまったく同様に彼の精神のなかにあります。実のところ、説明を要するのはこうした物理的感覚〔同士の結びつきの〕の規則性でした。たとえそれが精神に対して生じる場合でも、それが生じることに精神は責任がありません。生じる感覚に関して精神は受け身です。そうしたことの原因は精神の外側の世界だというのが、常識的な答えでした。世界の働きは規則的で一様であり、したがって感覚の発生はそれにより説明できるものでした。さてジョンソン博士はパークリー主教と同じくらい敬虔で、物理的世界が存在するとしたら、それ自体は神の創造と支配の結果に違いないと、同じくらい深く信じていました。もしその思考法にしたがうなら、何ゆえにこの不必要な世界を導入するのかと、パークリーはジョンソンに尋ねることになるでしょう。究極因は神の行為でした。ならばなぜ神は、外的事物の感覚を生みだす世界を創造せねばならないのでしょうか。もっと単純に、人間の精神に外的事物の感覚自体を、直接、生じさせればよいというのに。それは不必要な、宇宙を動かす5番目の車輪であるだけでなく、それにより一層、理解不能なことが生じます。どのように外的事物が霊的な（spiritual）精神に影響を及ぼすのでしょうか。経験から、わたしたちは自分の心がそれ自身に影響を及ぼすことを知っています。わたしたちの考えや行為を導く意志によるあらゆる行為がこの実例です。全能の霊である神が、やはり霊であるその被造物の精神に、選んだ通りの結果を生みだしうると、信じることには何の困難もありません。しかしわたしたちの精神に働きかける精神とは違うものを神が創造したと想定することは、余分であるだけでなく、わたしたちが理解できないことを想定することになります。議論を進めるため、こうした堅固で色彩に富み、音が聞こえる感覚をわたしたちの精神に生みだすため物質的世界を神が創造したと、そして神の知性の導きにより、この事物が一様にこうした感覚を生みだすようにいつも気を配られているとしてみましょ。さてもう一度、神とその被造物のあいだにあるこの世界を神が消しさり、またこれと同じ感覚を、直接、精神のなかに生みだすとしてみま

以下の文言。「これまでの原理によると、事物は瞬間ごとに消滅しては新しく創造される道理になる。〔けだし、〕感官の対象は、知覚されるとき存在するだけである。それゆえ、庭園の樹木や居間の椅子は、傍（かたわ）らに誰かがいて知覚するあいだしか存在しない。私が眼を閉じれば、部屋の調度はすべて無に帰し、そして眼を開けただけで、それらは再び創造される。」（Berkeley 1710:59=1958:75. 本訳文中、〔 〕内は本文、注ともに翻訳者による補足）

²⁶ 視覚と触覚の関連づけを恒常的と考えるか一時的と考えるかの違いはないと考える。すなわち、前注の引用部分に見たように、わたしたちの感覚の対象は神により、その観念自体が、逐一、創造されてわたしたちの精神に送りこまれてくると考える。その際、事物自体の創造という神の側が払う手間を省いている。

しょう。いったい、わたしたちはそのことに気づくでしょうか。そもそも、神がご自身のなさったことを啓示するにふさわしいと思うのでもなければ、わたしたちはそのことに気づけるでしょうか。バークリーとともにこの新しい思考法に乗りだすなら、彼をとめることができる地点などありません。いや、この新しい思考法に沿ってバークリーに待ったをかける唯一の方法は、デヴィッド・ヒューム²⁷のように、さらにはんの少し歩みを進めてさらなる問いを投げかけることです。すなわち、わたしたちの精神のなかの連想をたどって、精神の外にいる神の存在へと、わたしたちはいかにたどりつくことができるのでしょうか。というのは、結局、新しい思考法に従えば、因果という考え方は、精神のなかにある観念と記憶の結合にすぎないからです。この手順により、ひとは完全な懐疑主義へと到達します。もしこの論理的手順を論理的なバークリーが思いついたら、彼はどうするかと、ひとは思います。しかしこの手順は、次世代に属しており、バークリーの関心の対象ではありません。

しかし、ジョン・ロックの思考に従って、このさらなる一步を踏みだすまでのあいだにいるバークリーは、完全に論理的です。彼とその神、〔究極の〕原因、創造主、霊的宇宙の支配者のあいだにはさまる物質的宇宙など存在しません。物質主義の時代の前提に合致しているということにより、バークリーは物質的宇宙全体をおし流してしまいました。わたしたちの感覚の秩序と構造は神がわたしたちと会話する言葉にすぎず、その言葉により、どんな経験をするようになるのかが、わたしたちに指ししめされているのです。バークリーがこのうえなく繊細な手つきで分析して見せたところによると、わたしたちがある方向に進んでいく際には、触覚についてわたしたちの精神に神が印づけるシンボルに向けた視覚的感觉をもつことになります。彼の『視覚新論 (Theory of Vision)』²⁸は執筆当時と同様に今日でも説得力があります。とはいえ、わたしたちはそれを神学的にではなく、行動主義的に解釈します。バークリーの哲学で取りかかった考え方の例を、たぶん、ある経済学者の寓話により示すことができるとわたしは思います。バークリーとは違い、その経済学者はけっして完全に正統派〔の信仰者〕ではありませんでした。しかし、この寓話は彼が銀行業と金の保有について研究する授業で語ったものです。ある銀行では、金庫に引き当て用の金を貯蔵していました。その銀行では法定の比率に従って金券を発行し、したがって完全な健全性を保っていました。自分が手に入れられると分かっている限り、誰も金をほしがりませんでした。しかしある日、強盗が金庫のしたまで穴を掘って侵入し、引き当て用の金全部を運びだしたことが発覚しました。重役たちは会議を開きましたが、どんな手順を取るべきか決定することなく解散しました。こうし

²⁷ スコットランドの哲学者ヒューム (David Hume, 1711-1776) は、ロックやバークリーの経験論をさらに展開させ、原因と結果からなる因果関係を、時間的に前後する二つの事象が繰り返し生じることを観察した人間が、両者を関連づけて考える習慣を形成しているだけと考え、両者の間に必然的な関係を想定するには及ばないとした。こうした論点に関する主著は、『人間本性論』である (Hume, David (ed., L.A. Selby-Bigge), [1739-40] 1896, *A Treatise of Human Nature*, Oxford: Clarendon. (= [1995] 2019, 木曾好能訳, 『人間本性論 1 知性について』; =2011, 伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一訳, 『同2 情念について』; =2012, 伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一訳, 『同3 道徳について』法政大学出版局。)

²⁸ 1709, "An Essay towards a New Theory of Vision," [1948] 1979, *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, V.1, 141-239. (=1990, 下條信輔・植村恒一郎・一ノ瀬正樹訳, 『視覚新論』勁草書房。)

た逡巡はしばらく続き、その間も銀行業務は継続しました。重役たち以外でかれらよりも賢い者はどこにもおらず、したがって引き当て用の金があるかどうかを気にかける者はかれら以外にはいませんでした。銀行の重役たちのそのあとの行動を考察する必要はありませんが、この話をどう応用すべきかは明らかです。ここで、わたしたちは、延長と固さをともなう自分の感覚の世界をうろつき回ります。わたしたちの離隔 (distance) 感覚は、接触 (contact) 感覚を得るために何をせねばならないかを告げしらせますが、わたしたちは感覚なしですますことはできず、ある感覚から別の感覚に渡りあるくだけであり、そうした感覚すべては、法則に従い感覚からなる世界に配置されています。確かにこうした感覚に対応する物理的事物があるとわたしたちは想定していますが、わたしたちが関心を寄せているのは、自分が知的に行爲した場合に、ほかのある経験を得ることが保証されているという信念だけです。そこに強盗パークリーが現れて、わたしたちの前提の地下に穴を掘り、物質的宇宙を取りさりますが、それでも何と、すべては以前と同じように継続します。この物理的宇宙を創造したと想定されているのと同じ神の知性が、わたしたちの経験に与えられる意味について、直接、責任を引きうけ、自分の観念に対する物理的なうしろ立てが失われていることは決して見いだされないのです。そして銀行の重役たちとは違い、それがなくなったかどうかを見つけだす術もわたしたちにはありません。というのは、わたしたちは結局、そうしたうしろ立て自体を経験することなど決してできないからです。わたしたちの手に入るのは、もう少しばかり多くの感覚にすぎないでしょう。

エデンの園でのアダムとイヴよりも親密といえるほど、パークリーは神とともに歩みました。そして「死を、またあらゆる労苦をその致命的な味わいによって世界にもたらした禁断の木の実」²⁹のため、祈りと礼拝の時間のみならず、目のあらゆる一瞥、手足のあらゆる接触ごとに、パークリーはその創り主と絶えまない対話の状態に置かれました。彼は神の実在の確証をもっていました。そのまえではペイリーの時計 (Paley's watch)³⁰もどきまぎして逃げだすほどです。『アルシフロン (Alciphron)』³¹を開いて読み、驚いてください。とはいえ、それも北の地平線からデヴィッド・ヒュームという妖怪³² (specter) が立ちあがってくるまえの話ですが。彼はその哲学の教義を論理的な結論

²⁹ 「創世記」3章で、蛇のそそのかしに従いアダムとイヴが食べた禁断の木の実。たとえば1987、『新共同訳聖書』日本聖書協会、旧約3-5。以下『聖書』の参照箇所はこの翻訳により示す。

³⁰ いわゆる時計細工師のアナロジー (watchmaker analogy) を意識させる表現。自然界の精緻精妙な機構や造形の背後に、創造主たる神の知的意図 (intellectual design) を読みとる考え方。イギリスの聖職者、哲学者、功利主義者で自然神学 (natural theology) の提唱者、ウィリアム・ペイリー (William Paley, 1743-1805) の以下の著書で展開された考え方による。1802, *Natural Theology: or, Evidences of the Existence and Attributes of the Deity; Collected from the Appearances of Nature*, London: R. Faulder.

³¹ 1732, "Alciphron, or The Minute Philosopher," [1950] 1979, *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, V.3. 前出のマンデヴィルやシャフツベリのような自由思想家たちに対し、神の存在や摂理について反駁し論争した対話篇。

³² マルクスとエンゲルスの「共産党宣言」の冒頭の、「共産主義という妖怪」という表現でもちいられた言葉と同じ。Marx, Karl and Friedrich Engels, [1848] 1959, "Manifest der Kommunistischen Partei," *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 4, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz, 461-493. (=1960, 村田陽一訳, 「共産党宣言」, 大内兵衛・細川嘉六監訳, 『マルクス＝エンゲルス全集 第4巻 (1846-1848)』, 大月書

へと到達させることで、物質主義の陣営の側面を迂回して背後に出たのです。しかし同時代の自由思想家たち（free thinkers and libertines）を説得しよう試みる際には、かれらの不信仰は理性ではなく、意志、またかれらの作法しらずの衝動にかかわる事柄だと告白せねばなりませんでした。また結局、その巧みな言いまわしによっても、その原理の実際的な目的は達せられなかったのです。たとえわたしたちが不必要に経験の外側に物理的世界を想定してきたことに気づいても、自分のおこないがまったく干渉されないようにそのままの想定をつづけていくことができます。わたしたちのほとんどはパークリーであるよりジョンソン博士なのであり、力いっぱい舗道を踏みつけて脳から微細な霧を吹きはらうのです。『アルシフロン』の反響はおそらくバトラーの『アナロジー』³³よりも少なかったのです。両著作は、自由思想家たちの推論に対抗するための、同じ試みとして書かれたのですが。

パークリーの重要な哲学的諸論考は若き日の驚くべき早熟さとともに書かれ、彼は美しく仕立てた対話編において、それらにもっと親しみやすい形を与えました。ロードアイランドのニューポート滞在中に『アルシフロン』を書き、出版のために彼はそれを携えもどりました。アイルランドのクロイン（Cloyne）の主教職に任命され、そこで後半生を費やした職務を、彼はもっとも賞賛すべき形で遂行しました。後半生において新プラトン主義の領域に彷徨いこんでいくことで、自身の原理が最終的な哲学としては不適切であると、ある程度、彼も告白しました。彼は新しい思考法から立ちのいたのです。しかし彼はアメリカからタールを含有した水を、あらゆる病苦への無害な万能薬として持ちかえり、古代人からの学識豊かな引用で支持しながら、自身の後期の著作に混ぜこみしました。

パークリーの諸論考は、世界の哲学における古典のなかに座席が確保されたものとして放置してもよいのですが、彼の試みをその同時代の日常語による、流通していた捉え方から引きはがし、わたしたち自身の思考法との関連で語りなおすという課題がまだ残っています。パークリーが言っていたのはこういうことです。内的、外的生活においてそれを生きるころのわたしたちの経験は、わたしたちを超えて無限に延びひろがる現実の一部です。それらは同じ材質で、同じ内的性質をもっています。パークリーにとって、かなたに延びひろがるものは、彼の時代と彼の教会の神学との関連で捉えられた神でした。わたしたちはそうした材質をそうした用語では捉えていないかもしれませんが。わたしたちがその現実をどのように捉えていたとしても、わたしたちの経験もまたそれと地つづきです。わたしたちの想像力と思考において五感に現れてくるころの全世界は、わたしたち一人一人の経験に現れる現実の材質そのもの、宇宙の一側面なのかもしれません。言いかえると、パークリーのメッセージはこういうことでした。わたしたちの経験の本性は、そのおかげでそれが生じることになる宇宙の性質と同じなのです。そのメッセージは、物質を廃止するという形で、デカルトの心身

店、473-508.)

³³ 前注13参照。

二元論³⁴をさっさと始末してしまいます。パークリーは物質を抹消しましたが、わたしたちが経験する世界となる印象を神がそこに生みだしたように、神の精神のなかと、わたしたちの精神のなかに物質的世界からなる現実の全体を残しています。ロックの思考法を携えて、なおもっと論理的に歩みを進めたヒュームは、こうした印象とその外側にある何ものかのあいだの、およそ知られうる限りの結びつきを抹消し、霊的実体としての精神も抹消しました。この瓦解の模様をまえにして、ジェームズ³⁵やジョン・スチュアート・ミル³⁶のような人たちは、なおもロックの思考法を携えて歩みを進めながら、実際にはジョンソン博士の常識的態度に立ちもどりました。物理的世界はそこにあるもの、何らかのあり方でわたしたちの感覚や観念に平行しているものと想定されました。デカルトの二元論は確立されなおい、物質主義がさかえました。しかしそれは、パークリーが戦ったものとは違う唯物論です。近年の自然科学の目ざましい成長がもたらした物質主義なのです。

さて理論的には、科学の方もパークリーの原理を受け容れ、神の精神のなかにある宇宙の探索を続けていたかもしれませんが、もしそうなればパークリーの神学的形而上学の制約も、科学の側で受け容れることになったでしょう。科学では、創造主の目的について何の前提も持たずに自由に物理的世界を受け容れなければなりません。『アルシフロン』でのパークリーは、ミルトン³⁷と同じくらい、神のやり方の正当化に取り組み、人間を創造の中心に据えました。たとえ認識論上の問題の解決においてであっても、科学では宇宙における人間に何の優先的な地位も与えられはしません。そのようにわたしたちは19世紀科学の並はずれたおごりな構造を目撃します。そうした科学は、わたしたちの経験やわたしたちが経験することに関与するどんな哲学的問題にも完全に無関心でした。ニュートン力学は、「わたしは仮説を立てない (Non Fingo Hypotheses)」³⁸というニュートンの金言とともに一世を風靡しましたが。その意味は先の字義通りに、自分は仮説を立てないということではなく、自分は一切の理論的前提をおかないということです。

³⁴ ルネ・デカルト (René Descartes, 1596–1650) は近代哲学の祖。「われ思う、ゆえにわれあり」と人間存在の根拠を思考 (思惟) に求め、精神と、その認識対象となり広がりのある物質の領域を分けた。主著は『方法序説』(1637, *Discours de la méthode pour bien conduire sa raison, et chercher la vérité dans les sciences. Plus la Dioptrique, les Météores et la Géométrie, qui sont des essais de cette méthode*, Leiden: Jan Maire, 3–78=2010, 山田弘明訳, 『方法序説』筑摩書店。)

³⁵ ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842–1910) は、アメリカの哲学者、心理学者。チャールズ・パーズ (Charles Sanders Peirce, 1839–1914) が提唱したプラグマティズムの考え方を普及し、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859–1952)、ミードとともにプラグマティズムを代表する哲学者と見なされる。

³⁶ ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806–1873) は、イギリスの哲学者。政治哲学者、経済思想家。最大多数の最大幸福を目指すジェレミ・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748–1832) の功利主義の立場を継ぎ、20世紀思想にも各分野で大きな影響を及ぼした。

³⁷ ジョン・ミルトン (John Milton, 1608–1674) は英国の詩人。オリヴァー・クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599–1658) を支持した共和派の運動家でもある。代表作は『失樂園』(1667, *Paradise lost. A poem written in ten books*. London: Samuel Simmon. (=1981, 平井正穂訳, 『失樂園』上、下、岩波書店。))。

³⁸ ニュートン自身の語順では “Hypotheses non fingo”. 英訳は “I feign no hypotheses”. ニュートンの『プリンキピア』の1713年第2版で付けくわえられた「一般的総説 (General Scholium)」の末尾近くに見出される句。Newton, Isaac, [1687, 1713] 1795, *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*, 2nd ed., Reprint, Amsterdam: Sumptibus Societatis, 484.

諸科学がおのれの道を自由に進み、自分の方法にしたがうままにさせるということが叡智であったのなら、その叡智は諸科学の子どもたちについてもきつと正当化されるでしょう。というのは、諸科学が一世を風靡して、実験的方法を不可侵のものに保ただけでなく、諸科学が作りあげた世界の方でも、デカルト流の物質と精神の裂け目を埋めるうえで、顕著な進歩が遂げられたという証拠があるからです。19世紀においては、物質から精神へ向かうこのアプローチは生命諸科学に見いだされます。〔神が〕定めた種は姿を消し、種が生存闘争のなかに、生理的変異のなかにあらわれてくるのをわたしたちは見ます。こうしてわたしたちは人類という種の起源だけでなく、知性の進化も目撃します。わたしたちは生きて知性のある生物（organisms）を自然界のなかに置き、自然法則に従ったその発達を目撃する際に、生命に関する目的論や、生命体（living organisms）の諸目的を〔神の〕知性が成しとげることなどをもちださずにはいられません。しかしそうした〔目的論的に生命を捉える〕要請がなされること自体は必然であっても、その要請が自然諸科学のなかでも、ニュートン力学と調子を合わせていくのは不可能なようです。しかしながら、その問題がいまや科学の世界の側にあることは、注目せねばならないでしょう。哲学的思弁のいら立たいしい投影ではないのです。そうして、心理学は自然諸科学の一員となるよう志願し、その実験的方法を受け容れて、哲学の遺産から自身を解放しようともがいています。心理学が主に専念しているのは、具体的な内容を保ち、さらに科学的観察と実験のデータになることができるように、わたしたちの経験について語ることです。平行説と相互作用論³⁹のあいだの、また構成的（structural）、機能的（functional）、客観的（objective）、行動主義的（behavioristic）心理学⁴⁰のあいだの闘争は、すべて、わたしたちが

³⁹ ミード晩年の講義録を編纂した『精神、自我、社会』の第一部「社会行動主義の視点」（Mead, George Herbert (ed., intro., Charles W. Morris, Daniel R. Huebner and Hans Joas) [1934] 2015, *Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist: Definitive Edition*, Chicago: University of Chicago Press, 1-41. (=2018, 植木豊編訳, 『G・H・ミード著作集成』作品社, 199-239.))において、人間の意識は外界から独立して誕生の瞬間から存在すると考える平行説と対比し、ミード自身の考え方として、赤子が母親を含む他者と相互作用し他者の態度や役割を取得していくにつれて、意識が発生していくという相互作用説を展開している。

⁴⁰ 19世紀から20世紀にかけての心理学の発展を辿っている。グスタフ・フェヒナー（Gustav Theodor Fechner, 1801-1887）のヴェーバー・フェヒナーの法則（刺激の弁別閾は、基準となる基礎刺激の強度に比例する）などを代表とする生理学的な心理学（精神物理学）から発展して、ヴィルヘルム・ヴント（Wilhelm Maximilian Wundt, 1832-1920）やエドワード・ティチナー（Edward Bradford Titchener, 1867-1927）を代表とし、実験室での主観的な自己の観察である内観法をもちいて心を要素に分け、その組み合わせにより理論構築する構成主義心理学が展開する。ミードが19世紀末にドイツに留学して学んだのはこれである。留学後のアメリカのプラグマティズム哲学者が展開したのが、デューイの反射弓の理論（Dewey, John, 1896, “The Reflex Arc Concept in Psychology,” *Psychological Review*, 3: 357-370）などを代表とする機能主義心理学であり、内観に頼らず実験で得られた知識をベースに、経験や生活の実感を加味して諸現象を考察した。ミードの同僚であったシカゴ大学の心理学教員はこの立場をとる。これは先行世代の生理学的な実験心理学を、ダーウィン進化論以降の思想潮流に適合するように論じなおすものとも特徴づけられる。客観主義は20世紀初頭にロシアの神経学者、ウラジーミル・ベヒテレフ（Владимир Михайлович Бехтерев, ラテン文字転写：Vladimir Mikhailovitch Bekhterev, 1857-1927）が提唱し、生物学的反射作用の研究を深化させた心理学。ゲシュタルト心理学や行動主義心理学の基礎となった。行動主義はネズミや各種の動物を使った実験を通じて生物の知性を観察可能な行動から研究しようとするジョン・ワトソン（John Broadus Watson, 1878-1958）を代表とする立場である。ワトソン自身は大学を離れて実業界に転じ、現代のマーケティング理論はその直系の子孫である。上記の機能主義心理学から展開して、言語や意識を考慮しないやり方では人間の精神は捉えられ

実際に観察し、実験の主題にできるものは何かという点をめぐってなされています。各派の心理学者たちは、自分たちが科学的であり、一切、形而上学的前提はもちこまないようにすることに関して合意しています。合意していないのは、自分たちが観察しているものを、どう特定するのかという点です。精神を、心理学は科学の方法と射程のうちにもちこんできました。自然を精神と物質に二分することに固執するならば、その二分化は科学の領分にあります。哲学には責任がないものなのです。

20世紀に物理学者は並はずれた発見をしました。すなわち、もし正確な計測をなそうとするなら、計測者と計測されるものの相対的な運動を考慮に入れねばならないということです。また両者の運動の状態が場合により変動するように、空間的、時間的な計測基準も変化するのです。恒常不変の計測単位はありませんし、ありえません。もちろん、こうした事情から絶対的な空間や絶対的な時間ありません。そうしたものも観察者のパースペクティブや準拠枠により変動します。正確な科学者は以前から常にこのように想定してきました。異なった観察者がおこなった異なった推定は、かれらの知覚の差異により生じ、自然のなかにではなく、かれらの意識のなかだけにあります。このことが当てはまるのは時空の広がりだけではありません。質量や、どんな形態の、いわゆるエネルギーについても当てはまります。精神に属すると考えられてきた〔こうした認識や計測のぶれ〕は、いまでは、もっとも正確な科学が専念する計測可能な自然に属するものと考えざるをえません。自然のなかに何があるかは、単純にそこにあるもの自体で決まるのではなく、観察者によっても決まります。この場合は対象に対するその人の⁴¹相対的な運動によって決まるのです。さて、知るものに対する知られるものの、こうした相対性は、精神の哲学において大きな役割を果たしていますが、ここにあるのは、事物自体の本性が何なのかを定めるため、科学によりもちこまれた事物の観察者に対する相対性というものなのです。このことが観察者の運動について当てはまるなら、その感受性についてもまた当てはまるのではないのでしょうか。自然界の事物に色があるのは、視覚を付与された生物にたいして事物がある関係をとるためではないのでしょうか。事物、その特性と観察者という3者の関係で、正確な計測における事物の本性が決まるなら、観察の全段階に関して、それが当てはまることにはならないのでしょうか。精神が物質の性質に対してとる関係についての際だった問題の一つがもっとも思いがけない形で、科学自体のなかに現れているのです。

こうして科学としての生物学では、知的生物とその環境の関係の研究において、科学としての心理学では、環境に対し知覚する生物の研究において、相対性物理学では、観察者と観察される環境

ないとして、社会的相互作用を重視した立場をミードは追究し、自身の立場を相互作用論と呼んでいるようである。それを前注で触れた『精神、自我、社会』の最初の編者であるチャールズ・モリス（Charles William Morris, 1903-1979）が、社会行動主義と命名した。

⁴¹ 原文には his（彼の）とあるが、現代の視点から性別中立的に訳しかえた。以下、科学者や思想家などを指す一般的な人称代名詞が男性的である場合には、すべて同じ方針で性別中立的な表現に差しかえる。このような改変は、婦人参政権運動をはじめとする各種のフェミニスト的運動に賛同し、ジェーン・アダムズらの運動とも協同していたミードの立場には矛盾しないと考える。また三人称複数形の they, them も、古代以来の日本語において男女ともに指示しうる言葉であった「かれら」で示し、複数の男性のみを指すかのようにもちいられる「彼ら」表記は避けた。

との関係の研究において、科学が精神と自然の問題に関して汗水たらして努力する姿をわたしたちは見いだすのです。こうした新しい景観のもとで、精神と自然は同じ材質からなり、自然はわたしたちの知覚のなかにあるというパークリーの方向づけ（orientation）に関する古い原理が、再び支持されうるものとなり、それが受け容れられる機会も増大しています。科学者は専門職としての誇りをもってこのように主張します。自分が哲学づいているのではなく、精神的なものと思われていたものが物質の世界にどんどんもちこまれてくるにつれて、精神と物質の両者を相互に関係づける問題も自分が引きつぎ、哲学者の側でも、科学者の取りくみにおいて神のお告げが伝えられるのを待ちのぞむことができるだけなのだ。

自分自身の形而上学について、完全に責任を取れる人などいません。形而上学の構造の大部分を、その人は自分がその一部をなす時代や共同体から、避けがたく引きついでいます。その天才性が与える洞察にその人を取りまく景観は働きかけを受けるはずですが、それは自分自身のもの以外の景観の方をもっと意義ぶかく照らしだす洞察なのかもしれません。わたしたちの知覚の世界こそ現実の世界だというパークリーの洞察に、それが当てはまるとわたしは思っています。神との日々の対話として知覚を提示することで、パークリーが同時代の物質主義に対抗しようとした際には、ジョンソン博士が舗道を踏みならす足音、自由思想家が肩をすばめる姿、科学者の無関心に迎えられました。現実の世界はわたしたちの経験の世界だという断定は、こんにちではそれほど奇妙な形で現れることはありません。現実の世界は部分的にわたしたちの知覚のなかにありますが、神の精神のなかには完全に含まれていると、パークリーは見なしました。神が多くを経路を通じて開示する世界の意味や目的によって、わたしたちは自分のおこないを律すべきだという教訓を、彼はこのことから引きだしました。経験と現実を同一視しても、そうした教訓をわたしたちは何も引きだすことができません。わたしたちには自分のパースペクティブを補完する山中での〔神の〕幻（vision）⁴²など何もないのです。わたしたちが引きだすことができる教訓は、率直に言って、それとは正反対の種類のものであります。わたしたちは経験をコントロールできる限り、世界をもコントロールできます。それはちょうど、わたしたちが自分の経験において創造的でありうる限りは、世界においても創造的でありうるのと同じです。わたしたちは過去の経験から開示される秩序に合致する限りにおいてのみ、知性によって創造的になりうるのです。わたしたちは自然に従うことによって、それをコントロールします。そしてそれをかなりの勢いでおこなってきました。二つの地質学的時代の違いと同じくらい、人類が住む世界、特に西側の世界は、18世紀の世界とは違います。わたしたちはどんな植物や動物を自分たちのまわりに置くかを定めることができ、かなりの程度でそれを実行しています。直近の寒暖の模様からわたしたちの身体に起こることを定めることができます。どのような人種が、またそのうちどのくらいの人数が育てられるかを定めることができます。種の起源をかなりの部分まで決定すると信じるすべての条件が、わたしたちの手中にあります。そうしたすべて

⁴² 「出エジプト記」19-34章でシナイ山において十戒と呼ばれる戒律を神自身が教示すること、あるいは「マタイによる福音書」5-7章に記載されたイエスの説教も指すように思われる（『新共同訳聖書』旧約124-153、新約6-12）。

のことができて、わたしたちはその責任を受け容れてはいませんでした。そしてわたしはそれを引きうけます。このことがわたしたちの経験の世界と現実の世界の同一性から引きだすべき教訓でしょう。もし手段をコントロールできるなら、わたしたちが形づくることのできる新たな諸目的への責任が生じます。そうした責任を引きうけるにはわたしたちはまだまだ力不足です。わたしたちは20世紀の驚くべき世界をこしらえ、その内側で18世紀の戦争を戦おうとしました。その両手はエサウの両手ですが、その声はヤコブの声です⁴³。

この責任がどんな形を取るか、皆さんの前で開陳するような預言者では、わたしはまったくありません。またそのことができる者はありません。しかし、われわれの偉大な大学のなかでこそ、世界の科学的把握およびコントロールと、人間社会に必要なものとその希望のあいだに接触が生じ、そこからこうした責任の感覚と形態が湧きあがってくるにちがいないということが、わたしにはわかります。こうした理由から、偉大な主教の洞察と予見が、新たな時代の夜明けを彼が待ちのぞんだかのアメリカの偉大な大学に結びつけられることが、わたしには格別に適切だと思えるのです。

⁴³ 「創世記」27章22節（『新共同訳聖書』旧約 43）の、父イサクの祝福を受けることになっていた双子の兄エサウから、弟のヤコブが計略によってその権利を奪った説話に言及している。目の悪いイサクが、毛深いエサウの手と誤解するように、ヤコブの肌の子山羊の毛皮を巻きつけて偽装した。「声はヤコブの声だが、腕はエサウの腕だ」とイサクは言う。相対性理論という時代を超越した知恵を持ちながら、時代遅れの暴力的手段で、第一次世界大戦のような政治的な闘争をおこなったことのたとえか。